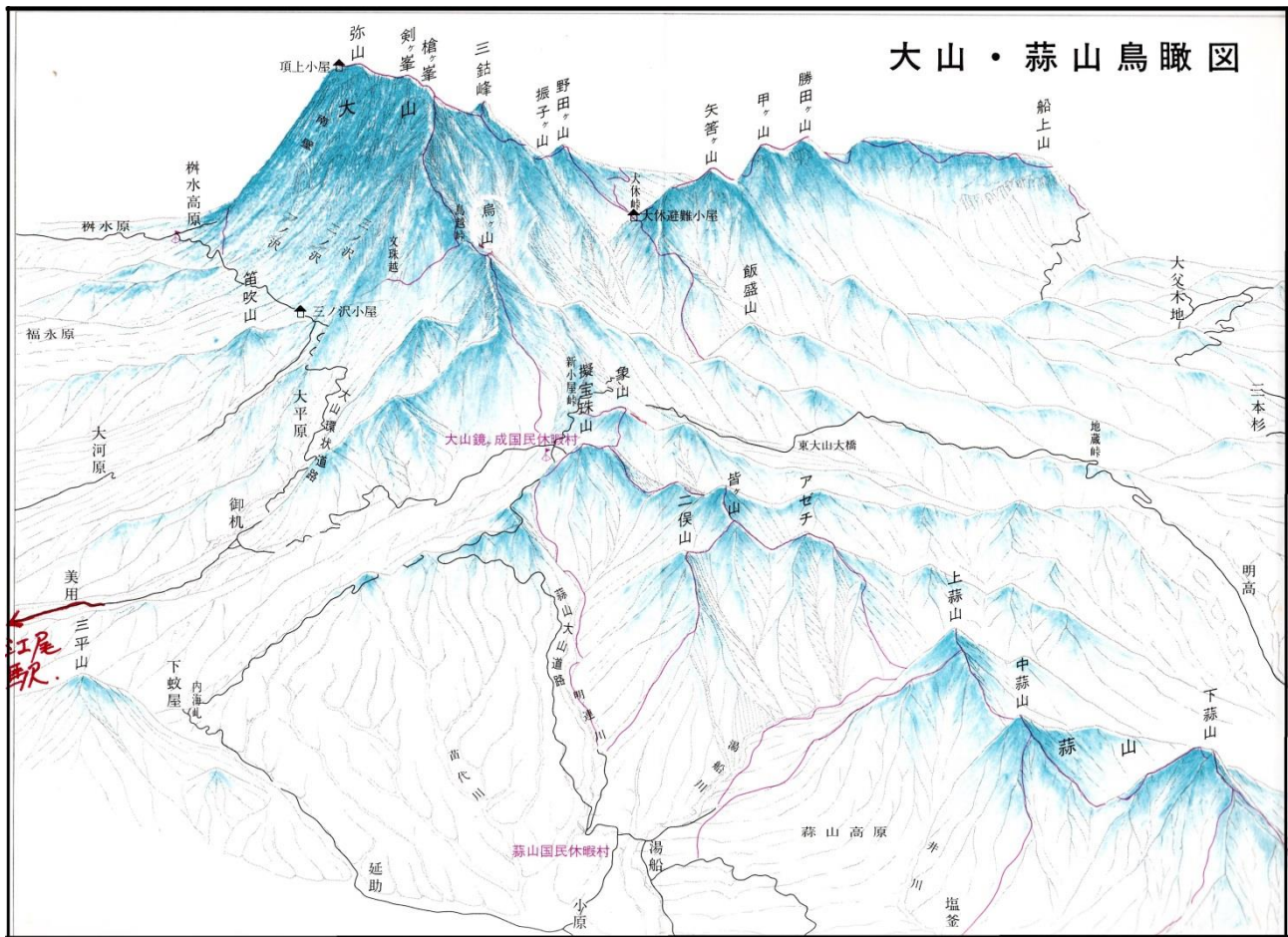


針の山と賽の河原 (異境偵察山行 伯耆大山ノ巻)

某年某月



(岡山・鳥取県境・鏡ヶ成上空より鳥瞰した伯耆大山の連山。国土地理院集成図)

人間、還暦を過ぎるとそろそろお迎えの準備もしておかねばならない。お迎えが近いかまだまだ元気旺盛かには関わらず、熟年の嗜みというものである。我がオカアチャンは、我が部屋の学生下宿同然に散らかした本や山のアルバム、山の道具、旅行の度に集めてきたガラクタの山を見て、「こんなガラクタは私や子供には一文の価値もないのだからネ。粗大ゴミはちゃんとお迎えの前に自分で整理していつて頂戴ヨ。残った者が捨て場に困るから」と喧しくノタマウのが常である。「心配するナイ、このオタンコ茄子。古本屋と骨董屋を呼べ。お前がヘソ天ヒルネで一生安穩に暮らせて、しかもお釣りがくるぐらの金にはならア。感謝をイタセ」。

お迎えの準備といっても、何もこちら側の世界のことだけではない。あちらの世の中で暮らす準備も必要であろう。無趣味の小生はあちらでも山に登るくらいしか楽しみがないから、一度偵察山行でもしてみるか。もっともあちらの山は針の山、沢は地獄谷、河原は賽の河原という責め道具ばかりだから、前世でウツナを喰らせ続けた小生は、希望せずとも一生針のムシロに座り続けさせられるだろうな。

という次第で、向こう側の山に登ってみた。

日本の山岳は「山嶽」とも書くくらいだから、この手の責め道具の整った山には事欠かない。熊野詣、羽黒十界修行、日光入峰修行、富士箱根修験、越中立山地獄、伯耆大山修験、石鎚山修行、彦山修験などは全て修験道の霊山である。「霊山」といえば死者供養のためというのが表向きではあるが、実は死者が業火に焼かれる責め場所であるから、どこまで行っても人間には安住の場所がないということになるナア。例えば、越中立山曼陀羅図には血の池で泳がされたり、鬼が持つ業火に焼かれたりしている亡

者の姿がリアルに描かれている。その中でも刑が一番軽い山は何処かいす。

たまたま、大学のサークル OB 会が岡山県の湯原温泉で開かれることになったので、その序に伯耆大山あたりはどうじゃろか。温泉で湯女とナニに戯れ、お神酒も鰯腹頂いた後だから、ご利益も大きいかも知れん。伯耆大山なら、若かりし頃の小生のホームグラウンドであるし、沢や尾根の一本一本まで熟知しているので(つもり)、いくら責められてもいつでも脱出できる用意もある。

旅は道連れ、いくら向こう側の旅といっても独りでは寂しいので、一緒に OB 会に行くパンチョを誘ってみた。奴は「俺は現世で何万人となく夜な夜なウヨナを泣かせたから、きっとあの世では閻魔様にチンポコを引き抜かれる！行きたくない！」と泣き面になった。冗談も休み休み言え。何が「夜な夜な何万人」だ。心配するなイ、閻魔大王閣下はこちら側の地藏菩薩様があちらで出張兼務していなさるのだ。お前がウヨナを泣かせる能力が無いことくらい先刻お見通しだ。逆に薄くなったオツムでも撫でて下さってまた生えてくるかも知れないゾ。

2004 年 3 月中旬、湯原温泉で豪遊した翌日、蒜山・大山スカイラインから大山環状道路を抜けて日本海に至り、国道 9 号を東上して山陰線赤碕駅から南下し、船上山に入った。丁度伯耆大山の南側から西側、さらに北側の山麓を回り込んで北北西側に出た勘定になる。かつて学生の頃攀じた南壁・北壁、下手なスキーを楽しんだ西麓の枡水原や北麓の豪円山など、懐かしくて涙が出てきた(ウチのババアに言わせると、馬齢を重ね過ぎて、単に涙腺のゴムが緩んできただけのことだそう。この糞ッタレ)。

今回の「あの世の山・偵察山行」は、大山主峰から 10km ほど北北東に位置する船上山(616m)から稜線伝いに南下して勝田ヶ山(1149m)、甲ヶ山(1338m)、矢筈ヶ山(1359m)、野田ヶ山(1344m)、振子ヶ山(1452m)から大山主峰縦走路に至り、東壁を下降して地獄谷を抜けて加瀬蛇川沿いに山陰線赤碕駅に出る山中行程 20km のコースである。前半の船上山から主峰までの稜線は大山噴火の時に出来た外輪山である。夏期には部分的には比較的ポピュラーなコースを繋いだものであるが、積雪期には殆ど入山者を見ない。特に後半の東壁下降から地獄谷を抜けるのは難物で、間違っ入り込んで遭難した人以外にはインテンショナルに通った人はいないと思われる。(余談であるが、中国山地の山の呼称は、「〇〇やま」、「〇〇だけ」という呼称は少なく、「〇〇せん」または「〇〇ゼン」と呼ぶものが多い。上に書いた「山」は船上山(せんじょうさん)を除いて全て「せん」と読む。ついでながら、「大山」は地元では「デーセン」と訛る。上州では「セン」や「ゼン」は滝のことを言う)。

スタートの船上山というのは、隠岐に流された後醍醐天皇が隠岐の行在所から脱出した時、伯耆ノ国の名和長年が天皇を迎えて陣を築いた山であり、歴史を変えてゆく諸合戦の舞台となったことは『太平記』に詳しい。船上山は当時は「ふねのうえのやま」と言った。日本海側から見ると船を逆さにしたような山容からこの名が付いた。この山の東側には屏風岩が連なっていて、天然の要害を構成している。奈良時代、智積上人が開基した霊場と言われ、この崖が修験の千丈覗きの責め場でもあった。

行宮跡の碑が建っているだけの頂上に天幕を張ってまずは後醍醐天皇にお神酒を奉る。暮れなずむ山頂からは、峨々とした三鈷峰や大山北壁が黒々と聳え、目を右に転ずれば燈を灯し始めた遥か米子市街の向こうに島根半島が薄墨色に霞み、その右側には日本海の中ノ海、弓ヶ浜、美保湾が残照を受けてきらきらと輝いている。これは極楽浄土の絵ではないか。西方の空に茜に染まった五色の雲でも浮かんでいれば、これはまさに阿弥陀来迎図。

初っ端から縁起が良いワイと後醍醐天皇お下がりの御神酒を頂きつつホルモン焼きの宴会に耽った。葷酒の極みではあるが、「酒池」を「血の池」、「肉林」を「針林」と読み替えれば多少の修行ともなろうと勝手な理屈をつけた。

千丈覗きで形だけの修験を済ませて、勝田ヶ山への稜線を辿る。積雪は 2m 程あるが、締まっているのでワカンを着けるほどでもない。この辺りはまだ里山で春になると里人がワラビを採る入会地でもある。かつて 40 年程前の 5 月にこのコースを歩いたことがあったが、地元の人が総出でワラビを乾かし

ていた。今でも山菜の入会地になっているのであろうか。

勝田ヶ山を過ぎて、甲ヶ山に至る。この山頂は岩場になっていて氷結したミックスである。面倒であったが念のためアイゼンを着けて通過。矢筈ヶ山から1300mピークまではなだらかな雪稜散歩であった。この辺りからは大山麓のなだらかな開拓村が良く見えた。牧場が多いようだ。遙か東側には倉吉市の街並み。

1300m ピークのブナが繁った急斜面を下れば大休峠である。大山主峰北側の阿弥陀川から東側の加勢蛇川に至る中国自然歩道が交差している大きな峠で避難小屋があり、ブナの巨木が繁っている落ち着いた雰囲気のある峠だ。

かつて山陰線がまだ通っていなかった頃、西伯の開拓地から東伯の開拓地に通ずる山道の峠で、旅人はここで大休みをしたのであろう。かつて40年程前にこの小屋に泊まろうとした時、某大学の傍若無人な学生達に占拠されていて、入り口の土間にシュラフを上げた記憶がある。今、避難小屋は屋根まで雪に埋まっていた。掘り出すのも大変なので小屋の横に天幕を張り、またまたホルモン宴会に精を出す。

翌朝、なだらかな斜面を野田ヶ山に登る。スタート地点の船上山からここまではブナ林の雪上散歩という雰囲気であったが、ここからは内輪山を構成する火口壁の岩と泥壁のミックスの世界となっていよいよ責め場の始まりとなった。伯耆大山は老年期の山で、殆どが泥で出来ているから崩壊が激しい。雪のナイフリッジとなった稜線の右側は荒々しい劔谷の地獄である。規模は小さいが、劔岳の東大谷を想い出していただければ想像がつく。劔谷は阿弥陀川となって日本海に注いでいるが、この阿弥陀川源流部は切り立ったゴルジュが連続する中国山地には珍しい悪溪で、この遡行にはゴムボートを必要とするほどである。

ここからアンザイレンしてコンティニュアスで行く。振子ヶ山から主稜縦走路の象ヶ鼻コブへの登り斜面は吹き溜まりとなっていて、雪崩の危険性が大きいから、アザイレンを解除して一人ずつ登る。雪の斜面は既に所々亀裂が入っていて、いつ雪崩れてもおかしくないようだ。前世の因縁が悪ければここが三途の川となるのであろうが、前世でウヰンナを泣かせ続けたと豪語するパンチョも無事通過できたのであるから、この豪語は空言であらう。

象ヶ鼻コブの直ぐ近くにはユートピア避難小屋が建っている。ここは何年か前の鳥取大地震の際、建物ごと破損し登山者も重症を負ったそうであるが、今は新しく建て直されていた。半分雪に埋まっていたが、空模様も怪しくなってきたので掘り出して今日はここに泊まることにした。夕方から風雪が強くなってきた。伯耆大山は日本海から直接屹立する独立峰であるから、標高の割には気象が激しい。日本海から吹きつける風がゴォーと小屋の壁を叩く。往古の禅定者にとっては、南無阿弥陀仏を唱えて必死に神仏に祈るに相応しい舞台廻しであろうが、宗教心が全く無い我々には代りにお神酒という強い味方があるから心強い。

翌朝は縦走路から槍尾根が分岐している天狗まで登り、いよいよ今回の責め場である東壁の下降である。東壁とは槍尾根の東面が泥壁の垂壁となって地獄谷に落ち込んでいるまさに地獄のような場所である。かつてパンチョと二人で雪の槍尾根を下降し槍ヶ峰から南壁の三ノ沢に下降したことがあった。この時は、猛烈な風雪に見舞われ頂上の弥山から最高峰の劔ヶ峰までの稜線では何処が雪面で何処が空間かも分からないようなホワイトアウト状態で、いちいち雪面の在り処をピッケルで確認しながら歩いた。直後に残した足跡もすぐに消えてしまうような風であった。この縦走路には大きな雪庇が南壁側に張り出しているが、よく雪庇を踏み抜かなかったものだと、今でも冷や汗がでてる。縦走路で思わぬ時間を消費し、槍尾根を下降する時には既に闇夜になっていて、雪面の反射でほの白い斜面の足下からは雪が流れ続けた。予定では稜線通しに鳥越峠に下って文殊堂から大山寺に帰る予定であったが、無意識の内に稜線上のラッセルを避けたのであろうか、或いは1秒でも早く下り降りてしまいたい衝動にかられたのであろうか、足は持ち主の意向と無関係にどんどんと三ノ沢の急斜面に踏み下っていった。足下から小規模な雪崩が連続した。南壁は全ての沢が雪崩の巣であるから、通常の状態なら、ここを下降

することなどは考えられない。何とか雪崩にも埋まらず安全地帯の文殊堂まで下降できたのは全く偶然の僥倖でしかなかった。かような気象条件下では当然のことながら縦走をやめて、弥山から下山すべきであったのだが、当時は若気の至りであったのであろう。大山寺に帰着した時は既に深夜になっていた。40年以上も前の学生時代のことである。



(伯耆大山・東面 太赤色破線が今回我々が歩いたルート)

天狗でハーネスを着けてアンザイレン、地獄谷の最源流・本沢の雪壁をトップを交替しつつ6ピッチ程スタカットで下るが、段々と沢幅が狭まってきて針の穴から天井を覗く態になってきた。これはイケナイ、雪崩れたら鉄砲雪崩だ。ゴルジュで流速を増加させた雪崩の激流に翻弄され、あちこちの岩壁で身体を木っ端微塵に砕かれた挙げ句、がんじがらめに雪崩の流心に固め込まれて、いよいよ閻魔様の前に引き出される羽目になろう。女犯のパンチョは魔羅を、小生は大法螺吹きの手で舌を抜かれるであろう。恐怖で足が震え、御叱呼がチビリだした。とっさに少しでも高いところへと、隣の壁沢を分けている小支稜のコルに駆け上がった。ここなら雪崩れても大部分の流雪は左右の沢に落下するから比較的安全と思うが、これとて雪崩発生に伴う爆風で吹き飛ばされるかもしれない、また槍尾根東斜面全体が雪崩れるような大規模雪崩が起きればひとたまりもない。またまた御叱呼をチビッてしまった。万事窮すか、御名御璽。

虚ろな目になって反対側の壁沢を見てもなくぼんやりと眺めてみた。ここは本沢より更に狭く切り立った岩のゴルジュで垂壁のために雪が付かず蒼氷が貼り付いている。それに本沢に比べて流程も短い。雪崩にやられる確率は滞在時間が短い分だけ本沢より低いと踏んだ。壁の高距も50mほどだからザイル2本を連結すれば懸垂下降で下まで届きそうだ。

なあパンチョよ、この沢の出口がどうなっているか分からんが、例えどうなったとしても魔羅を引き抜かれるよりマシだろう。どうじゃ、ここを下ろうではないか。見れば野郎もすっかりその積もりで、懸垂支点のスノーボード作りに掛かっていた。雪が若干柔らかであったので、入念に作った。

アンカーも破壊されることなく滝壺に下ってみると、なるほど針の穴から天井ではあるが、僅か300mほど先で本沢の傾斜が緩くなった部分に合流していた。アア、助かったなア。チビッたオシッコで股ぐらが凍って冷たいが、キンタマが多少の凍傷になるくらいは我慢しなければなるまいテ。

デブリが堆積した沢筋を下って駒鳥小屋に入る。この小屋は地獄谷で遭難した遺体などが何回か搬入された小屋と聞かされていたせいもあって、何となく抹香くさくて陰気な小屋であるが、今回は禅定の道行であるから、それに相応しい舞台かも知れない。まあ御霊前に担ぎ上げた酒でも捧げようではないか。駒鳥小屋の正面に見えるやや広い沢は振子ヶ山から発する振子沢である。今下ってきた本沢とは象ヶ鼻から派生している尾根で隔てられた右側の沢だ。昔この沢を5月の残雪期に登っていて、雪溪を音もなく飛んできた頭大の落石に肝を冷やしたことがあったのを思い出した。あの時は、今は山を止めている堀南海男も一緒だった。

翌朝、広い河原となっている地獄谷を下る。烏ヶ山の崩壊した東斜面が荒々しい。振袖山の裾を大きく左に回り込めば、再び廊下状の溪となって一昨日幕営した大休峠から流れ出す大休滝や振子山東面からの地獄滝が落下している。ここからが今回の禅定の最後の責め場である。この辺りは狭い廊下に兩岸から雪崩れた大量のデブリが堆積しているが、標高が700m程に落ちているから融雪が早く、河床を雪解け水が流れ、スノーブリッジやクレバスが隠されている。確かに雪溪の下からゴーゴーと水流の音が聞こえる場所もあり、怖い。廊下が狭くて切り立っている上に、屈曲が激しいから雪溪を削る流水が一樣でなく、雪溪の厚さが場所によって大きく異なっている。

アンザイレンしてコンティニュアスで進む。こういう場合にヒドゥン・クレバスに落ち込むのは通例トップの方である。オイ、パンチョ、お前トップを行け。イヤ、俺はイヤだ、目方が軽いお前が先に行け。トップを譲り合っても先に進まないから、閻魔の前で女犯のパンチョと大法螺の小生、どちらが罪が軽いかといえば、大法螺の方であろうから、仕方ない、小生が先に行くことにしよう。その代わり万が一の場合は後ろからしっかり確保イタセ。

カモシカや熊やキツネなどがクレバスに落ちた話は聞かない。動物には危険な路を避ける能力が備わっているのだ。小生も山中では動物的な勘が鋭い。この勘は、クロマニヨン人の遺物的能力を小生の遺伝子が継承しているということではない。もしそうなら、小生は生きた化石になるではないか。困難な岩壁や沢でのたゆまざるクライミング訓練と、マウンテニアリング理論の研究に寝食を忘れて取り組んで体得した成果であるから、その辺の余人には真似ができないであろうナ。

さて、クンクンとその動物的勘を働かせて雪溪を下る。雪溪が薄くなっている箇所は、だいたい雪溪の色が微妙に黒ずんでいるか、逆に白く透けているように見えるものだ。しかし、運悪く一昨日降った新雪が薄く積もっていて、元の雪溪表面の状態が隠れてしまっていた。大きなデブリの山を越えた時だった。突然スーと身体が宙に浮いたと思ったら、いきなり真っ暗な穴の壁に激突した。何が起きたのか最初は分からなかった。どうも頭が下に向いてぶら下がっているような気がするが、夢を見ている感じでボーとして暫くは何も分からなかった。上の穴から入る陽の光りで微かに穴の中の様子が見え始めた。何と周りは全て氷の壁で薄蒼色に透けているではないか。頭の直ぐ下にはゴーゴーと水が流れている。これはイケナイ!! 頭がこの水中に落ち込んだら冷凍庫の中で溺死だ!! 助けてくれエー、オカアチャン。パンチョはどこだッ。必死で頭を上にならねともがくが、ザックが氷の隙間に挟まれて何ともならぬ。神様、仏さま、南無阿弥陀仏!! ザイルに掴まってウンウン唸っているうちに、スッポとザックが氷から抜けて足が下に廻った。助かった、溺死だけは免れた!! しかし足が水中に落ち込んで段々と感覚が無くなってきた。早くこの穴から上に脱出せねばならないのだが、気が焦るばかりで、身体は金縛りにあったようで全く動かない。段々と意識が遠ざかってゆくようだ。モンブランのヒドゥン・クレバスに落ち込んで16時間氷漬けになった後、心停止寸前で奇跡的に助かった日本人クライマーの話があったなア。低体温症の後遺症で1年間現地で入院を余儀なくされたとも書いてあった。このままでは俺様も低体温症で死んでしまう。ここでいよいよ御名御璽か。ハッとして目が覚めた。上を見上げると、先程落ち込んだ暗い穴が垂直に10m程続いているようだ。

オーイ、パンチョ、助けてくれー、ザイルを引いてくれー!! しかし、何の返事も無い。ザイルもピクツとも動かない。叫び声が穴蔵にこだまするだけだ。無意識にハーネスのギアラックからタイブロッ

ク(墜落してザイルに宙づりになった時、上に登り返すためにザイルに絡ませる器具)を捜して、ザイルにセットして登り始めた。しかし、手が凍って感覚が無く、力が入らない。何時間程ぶら下がっていただろうか。やっと雪の上に這い上がった途端腰が抜けて座り込んだ。

パンチョはと見ると、うつ伏せの状態でピックを打ち込んだまま足を踏ん張ってビレーし続けている。オーイ、パンチョ、ありがとヨ。彼は前を歩いていた小生の姿が消えた途端に前に引かれてつんのめり多少流されたが、すぐさま体制を整えてピックを打ち込み、ザイルで制動を掛けて停止させてくれた。お見事であった。しかし、そのまま姿勢が変えられず、確保体制から脱出できずにいたために、穴に近づいて様子を見ることもできなかったそうだ。穴に墜落してから既に1時間45分が過ぎていた。

奴が俺の身体をアンカーに結び付け再び滑り込まない様にしてから、穴を覗いてみた。真っ暗な穴が初め垂直に、その先からは斜めに落ちていて、底からは流水の音が聞こえていた。大きなクレバスであった、奈落の底。改めて恐怖が甦り、またまたオシッコを漏らしてしまった。

水中に浸かっていた足の指先の感覚が全く麻痺しているようだ。果たして歩けるのか? 抜けた腰も何か頼り無いようだ。靴を脱いでみると指先が白色に変色していた。これはかなりの凍傷だ。ここは大山滝の少し上流の「大休口」であり、ここで前記の中国自然歩道が出合っている。計画では地獄谷を忠実に最後まで下ることにしていたが、これでは何とも致し方ない。奴に二人分のザックを担いで貰って、大休口から一般登山道に這い登り、半分這いながら何とか最初の部落である野井倉部落に辿り着いた。通常なら1時間強で下れる路が4時間掛かった。

もう足指が痛くて歩くことができない。しかし、痛覚が戻ってきたということは凍傷が悪化はしていないという証拠だ。民家からタクシーを呼んで貰って山陰線赤碕駅近くの外科医院に飛ばした。医師の話ではもう少し症状が進んでいれば足指切断とのことであった。ア～ア、助かったなア。神様、仏様、キリシト様。では、お礼に御神酒を差し上げて、そのお下がりをご頂こうではないか。オット、先程の医師から酒類はきつく禁じられたばかりであったナ。パンチョよ、独りで吞んで、俺にもせめて匂いだけでもかがせてくれないか。

今回の「異境偵察山行」は、かような次第でチンポコも舌も抜かれず、何とかこちら側に舞い戻ることができたが、小生は凍傷の治療で1ヶ月間ほど医者通いとなった。この偵察紀行でもまたまた法螺を重ねたから、閻魔帳の点数が更に下がったことであろう。本当にあちらに行った時には、「舌抜き」の刑ではなく、もっと重い「舌吊り獄門の刑」(舌を紐で括って身体を獄門からぶら下げられる刑)に処せられるナ。パンチョの魔羅吊り獄門の刑よりマシかも知れないが、法螺吹きも心すべきことではある。

(2004/02/29 記)

(本稿 完)

[「夢幻の山旅 私の机上登山」目次へ戻る](#)